

千葉県立博物館（大利根 & 関宿城）連携展示 パネル展「高瀬船」

江戸時代に発達し、日本最大の川舟として江戸と関東各地をつなぐ主要輸送手段として活躍した利根川高瀬船。東北や房総沿岸の荷を銚子から積み、また利根川水系の周辺農村部から様々な物資を江戸へと運びました。更には、これにより利根川・江戸川流域には多くの産業も育まれました。今回の展示では、今に残された昭和期の高瀬船の写真を中心に展示し、輸送手段としての船の重要性を伝えると共に伝統的な和船の構造や技術についても紹介しています



土浦より霞ヶ浦の遠望

明治44年・霞ヶ浦

当館蔵

遠く見える山影は筑波山。利根川水運は、霞ヶ浦も含め、茨城県南部の各所ともつながっていた。写真の高瀬船は帆に幾重にも「継ぎ」があてられており、帆が貴重なものであったことが分かる。これは、強風や荷の多い時に使われる「弥帆」のようで、もう一本帆柱が寝かされている。その先端に見えるのはセミ（滑車）を保護するためにかぶせておくセミ箱である。



利根川風景 香取ヶ浦

大正～昭和初期・香取市

当館蔵

右手奥に見えるのは、稲藁をいっぱい積んだ高瀬船。左側に舵の上部が見える。風力を使う帆と人力の櫂、両方で船を進めている。向こう岸の堤の下には茅葺屋根の家が見える。



江戸川の松戸沿岸

大正～昭和初期・松戸市

当館蔵

風を受けて江戸川を遡る高瀬船である。写真左手の高台の下が千葉県松戸側、右側が埼玉県三郷方面となる。船の荷はほとんどなく喫水は浅い。船頭2人のうち、一人は棹をさし、もう一人は舵を取っている。舵取りは手ぬぐいを姉様かぶりをした女性にも見える。大正期には夫婦二人で高瀬船に乗ることも多かった。



江戸川を曳かれゆく高瀬船

市川市 当館蔵

エンジンを積んだ機械船が普及してくると、積載量とスピードの両方を確保するため、高瀬船に荷を積み、これを機械船に曳かせる方法が用いられるようになった。写真のように何艘もの高瀬船を繋ぎ、機械船の動力と高瀬船の帆を両方利用して、川を遡っていった。